

潰瘍性大腸炎、クローン病

潰瘍性大腸炎ってどんな病気なの？

大腸粘膜が炎症を起こしてただれ、びらんや潰瘍を形成します。症状は粘血便ねんけつべん、下痢、腹痛などです。20～30代の若年成人に多く発症しますが、50～60代の人にもみられます。いったんよくなったように見えても、数カ月から数年後に悪化することがあります

厚生労働省の調査によると、2011年の潰瘍性大腸炎の患者さんは約13万人とされており、年々、患者数は増加しています。



クローン病ってどんな病気なの？

小腸、大腸を中心とする消化管に炎症を起こし、びらんや潰瘍を生じる慢性の疾患です。症状は、腹痛、下痢、下血、体重減少、発熱などです。20代に最も多く発症しますが、ほかの年代にもみられます。欧米に多く、日本では比較的少ない疾患ですが、最近患者数が増えています。潰瘍性大腸炎と似ている点も多く、2つをまとめて炎症性腸疾患と呼びます。

- 血便
- 粘血便
- 下痢
- 腹痛
- 体重減少、貧血、発熱

※症状があれば、大腸内視鏡検査を受けてみましょう。

抗TNFα抗体製剤（レミケード、ヒュミラ）

潰瘍性大腸炎において、大腸の炎症に深く関与しているTNFαの働きを抑えるために開発されたのが抗TNFα抗体です。

インフュージョン外来

インフュージョンとは点滴と言う意味で、抗体医薬であるレミケードやヒュミラが導入されて、炎症性腸疾患患者で病歴が短ければほぼ入院や手術を回避出来たり、長い間クローン病でも入院や手術が減らせると言うことです。

欧米では、抗体製剤注射は、もはや大学病院で受けるものでなく、点滴治療を専門とした病院で受けることが浸透しつつあります。

内科・消化器科医師が担当します

診療をご希望の方など、詳しくは1階医事課受付にお尋ねください